佐伯史談会発足四十周年にあたり

会長　汐月三代吉

昭和三十三年三月、佐伯地域の地方史ならびに文化、民俗について調査・研究し、会員の教養を高め、地域社会に奉仕することを目的として、高木嘉吉・羽柴弘の両氏を中心に十一人の有志で、佐伯史談会が発足してから今年で四十周年となります。会の現在の発展を見るとき、いまさらながら深い感銘と、その歴史の重みを通感せずにはいられません。

会が歩んで来たこれまでの四十年を振り返るとき、必ずしも順風満帆とは言えず、幾度か危機に見舞われたこともあったと考えられますが、会の今日があることの一つには、事務局を担当した羽柴弘氏の献身的ともいえる、大きな支えがあったからだと思っています。

その事績は、会の発足以来二十三年間、一二一号を数えるまでも続けられた「ガリ判刷り」の会誌を見ればお分かりでしょう。会員たちの原稿を、ただ黙々と鉄筆を握り、一字一句刻み続ける同氏のその執念と情熱に励まされ、各種の苦難を越えて会の維持・発展が図られて来たと言っても過言ではありません。

その後諸先輩の意志を受け継ぎ、会誌は活版刷りに改められ現在一七九号となり、会員は三二〇人を擁する大きな郷土史研究会として発展して参りました。

ここにあらためて、これまで会の発展のため尽くされた今は亡き先輩の方々、その後の発展に寄与された会員・会友の方々に対し、心からお礼申し上げます。

さて、四十年の歩みの中でも、これまで例年行われる数々の行事や研修旅行ほか、会の運営等についても活発に活動して来ました。その主なものを挙げると次のとおりです。

一、三の丸櫓門の修復では、史談会が中心となって取り組み、完成させたこと。

二、故村井強会員の研究、オランダ船リーフデ号佐伯湾漂着説をもとに、漂流実験を二度にわたり行ったこと。

三、会員の研究成果を発表する会（研究発表会）を設けたこと。

四、規約に基づいて各部会を制度化して担当者を定め、常任評議員会を定期的に開催し、話し合いの場を持つようにしたこと。

五、「ガリ版刷り」の史談を六巻にまとめ復刻版を発行し、保存本を全巻取り揃えたこと。

六、佐伯図書館内に専用図書室を置き、蔵書整備を行ったこと。

七、誰でも自由に参加できる「ふるさとを語る会」を設け、民俗を基調とした会話の中から「杖」を取り上げ、第一集として発刊したこと。

これからは高速道の時代となり、佐伯でもいよいよその計画が現実のものとなって来ました。地域間の交流がより活発となり、この地方を訪れる人々に、歴史的な情報を求められる機会も多くなるでしょう。自分の地域の歴史について一定の知識を持つことが、地域振興の上で重要な役割を果たす時代です。会員一人一人が自分の研究のみに止まらず、広く地域の人々の歴史認識を高めるためにも、新しい会員を誘って欲しいと考えています。

そうして、気軽で親しみの持てる史談会にしたいと思いますので、なお一層のご支援を賜わりますようお願いして、ご挨拶とします。

平成十年十月